

空間への欲求に見る今和次郎の「装飾論」―旧渡邊甚吉邸のデザインを通して―

中谷礼仁研究室 旧渡邊甚吉邸研究ゼミ所属 5219A082-1 中下桂

目次構成

【序論】

第0章 本研究について

- 0-1.研究背景
- 0-2.研究目的
- 0-3.研究方法
- 0-4.既往研究

【本論】

第1章 近代日本と今和次郎

- 1-1.近代日本
- 1-2.今和次郎の生涯
 - 1-2-1.基礎情報
 - 1-2-2.「白茅会」での出会い
 - 1-2-3.関東大震災とバラック装飾社
 - 1-2-4.「考現学」
- 1-3.他者比較に見る今和次郎
 - 1-3-1.分離派批判
 - 1-3-2.柳田國男
 - 1-3-3.吉田謙吉
- 1-4.小結

第2章 服装研究と裸の起源

- 2-1.建築と造形と服装
- 2-2.衣服の起源と毛のない人間
 - 2-2-1.自然淘汰論
 - 2-2-2.自然淘汰論の否定
 - 2-2-3.性淘汰論
- 2-3.今和次郎の服装研究
 - 2-3-1.服装史研究
 - 2-3-2.流行と女性
- 2-4.小結

第3章 被覆と建築

- 3-1.被覆と建築
- 3-2.西欧の被覆理論
 - 3-2-1.ゼンパーと始源論
 - 3-2-2.ロースト虚偽の被覆・女性のモード
 - 3-2-3.コルビジェとリポラン法
- 3-3.今和次郎と被覆
- 3-4.小結

第4章 今和次郎の装飾論

- 4-1.今和次郎の装飾論への推論
- 4-2.旧渡邊甚吉邸の内装装飾
 - 4-2-1.旧渡邊甚吉邸の基本情報
 - 4-2-2.旧渡邊甚吉邸の内装
- 4-3.小結

総論

- 参考文献
- 図版出典
- 謝辞

序論

0-1：研究背景

現在、今和次郎は民俗学研究の第一人者として広く知られる人物である。その功績は様々なところで見受けられ、彼が提唱した「考現学」は構成にも広く影響を与えた。しかしながら、彼の装飾デザインが実現し、また残存していることは非常に稀である。そんな彼が手がけた数少ないデザインの一つに、「旧渡邊甚吉邸」の内装デザインがある。

旧渡邊甚吉邸は 1934 年に竣工した建築であり、英国のチューダー様式に基づき、そこに日本的要素を組み込んで設計された建築である。本設計では、全体設計を山本拙郎、実施設計を遠藤憲三、そうして細部設計を先述した今和次郎が担当している。中でも今和次郎の細部設計に関して、今和次郎が設計した室内装飾やカトラリーなどが数多く残されている。これらのデザインを起点に、民俗研究家としての今和次郎でなく、デザイナーとしての今和次郎を考察することを本論文の発端とする。

0-2：研究目的

上記で述べたように、本論文の主目的は今和次郎の装飾論を明確にし、彼の特異性を明らかにすることである。その上で、本論文での論点を以下の三点に整理する。

- ①今和次郎の主張を整理し、明文化する
- ②「衣服の起源」「被覆論」を通して今和次郎への影響を考察する
- ③旧渡邊甚吉邸における今和次郎の装飾論を明らかにする

旧渡邊甚吉邸は、歴史的に非常に価値が高く、また優れた建築である。これは三人の設計者によって完成された建築だが、そこにおいて、今和次郎が担当した装飾がどのような役割を持ったのかを、旧渡邊甚吉邸の評価や①②でまとめた今和次郎の姿勢を通して③にて結論を出し、考察していく。

0-3.研究方法

目的①： 既往研究や文献の精読を行い、まず今和次郎の主張や、他者比較から見える彼の主張を明確にしていく。また、彼に影響を与えた人物、現象を考察していく。

目的②： 今和次郎の蔵書リストや服飾研究から「ダーウィニズム」「被覆論」からの影響を考察し、①の今の特色との類似点、相違点を探っていく。

目的③： はじめに今和次郎の装飾論の推察を行い、①②を踏まえて論じる要点の再確認を行う。その後、旧渡邊甚吉邸の基本情報や既往研究をまとめ、そこにおける今和次郎の立ち位置を整理していく。最後に推察と彼の装飾デザインを重ね合わせることで、旧渡邊甚吉邸における今和次郎の装飾への姿勢を読み解いていく。

◎論文構成

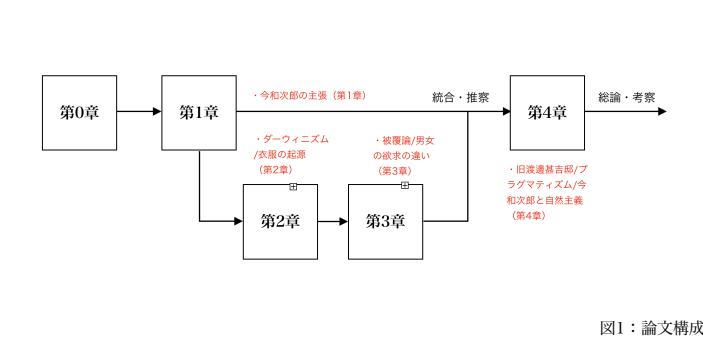


図1：論文構成

0-4.既往研究

今和次郎に関する研究は多くあるが、旧渡邊甚吉邸における今和次郎の装飾論に関する直接の既往研究はない。また、旧渡邊甚吉邸に関する既往研究は、旧渡邊甚吉邸サポーターズによる研究が主である。

◎今和次郎研究

- ・川添登『今和次郎―その考現学―』(筑摩書房、2004 年)
- ・黒石いずみ『「建築外」の思考：今和次郎論』（ドメス出版、2000年)

◎旧渡辺甚吉邸研究

- ・野村渉「旧渡辺甚吉邸に見る日本的プラグマティズム -近代日本建築との相克-」(2017年度 中谷礼仁研究室)
- ・政本悠紀「室内装飾の変遷と旧渡辺甚吉邸 -女性雑誌と三越家具部を中心として-」(2017年度 中谷礼仁研究室)
- ・宮原秀明「あめりか屋・山本拙郎の住宅作品の派生としてみる旧渡辺甚吉邸―実測・解体調査と『和洋設備設計の知識』を通して―」(2018年度 中谷礼仁研究室)
- ・LIXILギャラリー企画委員会『奇跡の住宅―旧渡辺甚吉邸と室

本論

第1章 近代日本と今和次郎

第1章では、今和次郎の主張を捉えるため、彼の主要な活動とそれに伴う理論の変化、他者との対立を述べている。

今が生きていた時代は変化の時代であった。西欧から様々な理論や様式が流入し、国内でその模倣を重ねて行く中で、「日本独自の様式」を生み出さんと建築家たちが踏み出した時である。

そのさなか、今和次郎は「白茅会」での活動を通して多数の田舎の民家に触れることとなり、「関東大震災」をきっかけにその視線を都会へと向けていった。極限な状況下において、より人間の原初に近づいた条件のもとに作られたバラックは今に田舎の風景を想起させた。他ならぬ東京で、そこに田舎の景色を見たことにより、建築が、時間、場所、条件を変えた中で姿を変えていく点に着目することとなったのである。

その後、今和次郎は都会で「考現学調査」を行っていく。ここで今は印象と実際の統計数の違いから、統計によって現実を理性的に捉えることの重要性に気付くことになる。

しかし、吉田謙吉があらわしたような「断片」的な現象も現実には必要不可欠であった。この気付きは、彼のドローイングの基盤としていたラスキンのドローイングの理念である「現象の科学」を表現するのに大きく役立ったに違いなかった。また、今は分離派、柳田國男、吉田謙吉と立場を異にしている。これは、当時の世風であった「様式建築の否定」や、民俗学に対する「工芸の美」への賛美、統計と断片によって確固たる理論を打ち立てられる「合理性」が今に際立っていたからと考えられる。当時の建築家、民族研究家、芸術家とも異なる、世間に囚われない全く新しい視座を彼は独自に獲得していた。

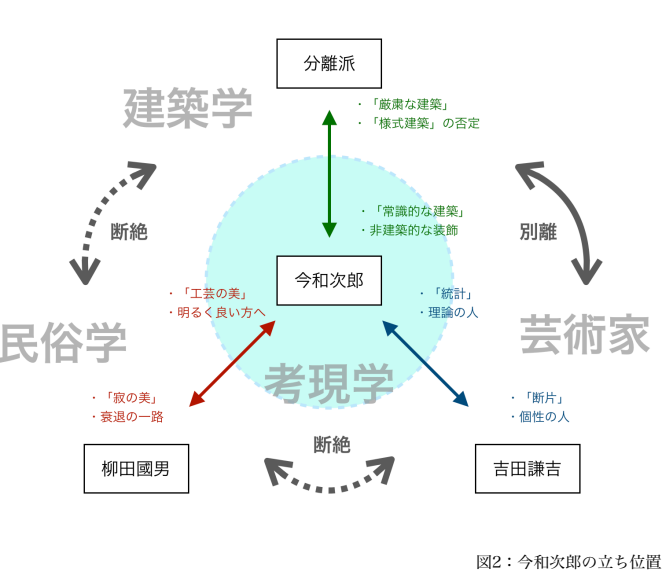


図2：今和次郎の立ち位置

第2章 服装研究と裸の起源

第2章では、今和次郎が衣服と建築を同様に造形と捉えていたことに着目し、彼の服装研究に関する言説、および、衣服の起源について、ダーウィニズムとそれに伴う批判についてを述べていった。

この章でダーウィニズムに多く着目している理由として、チャールズ・ダーウィンがその功績により後世に広く影響しているということに加え、今和次郎がダーウィンの言説に少なからず影響を受けていた可能性を模索していることがある。

今和次郎がダーウィンに傾倒していたかと言う点について、断言することは出来ない。その上で、今和次郎が、早期に翻訳されたダーウィンの『種の起源』やそれ以前の著作である『The Structure and Distribution of Coral Reefs』を所持していたこと、また、彼の所持していた二冊の動物学に関する洋書が、前書と、ネオダーウィニズムの提唱者であったジョージ・J・ロマネスの著作『Animal Intelligence』であるということに着目した。

ダーウィンは生物種の進化について、「自然淘汰」と「性淘汰」によって説明できるとした。しかし自然淘汰については他ならぬその発案者であったウォレスに人間の進化を説明できないことを指摘され、性淘汰についても結果論である等さまざまな批判が寄せられた。そうしてウォレスやヴァイスマン等の論を含めた上で、新たにネオダーウィニズムが唱えられるようになっていった。

生物学者であるリマ＝デ＝ファランは、日本国内でのダーウィニズムおよびネオダーウィニズムについて、19世紀末には日本とヨーロッパの学問分野が深く関わり切っていなかったこと、ネオダーウィニズムの発祥と第二次世界大戦が重なったこと等を挙げ、そこまで深く浸透はしていなかったという事実を述べている。しかし、今和次郎がダーウィンに全くの無関心であったとは思えず、むしろ、こと動物学において、彼はダーウィニズムに強い影響を受けていたのではないかとすら推察できる。すなわち、今和次郎は国内で早期にダーウィニズムに目を向けていたと指摘した。

また、ネオダーウィニズムにて、ダーウィニズムに加えられたランダム性が考現学調査での「断片」的なものに類似しているのではという考察も同時に述べている。今和次郎はダーウィニズムに影響を受けたのみならず、独自により解像度の高い理論を打ち立て、服装や建築を含めた「造形」に向き合っていたのではないかという点をここでは指摘した。

第3章 被覆と建築

前章までで、今和次郎は、「建築という体」に「装飾という衣服」を着せるようなデザイン感覚を持っていたことがうかがえる。これに似た立場として、第3章では、ゴッドフリート・ゼンパーに始まる「被覆」と建築の関係について述べている。ゼンパーは、空間を設定することによって、建築のはじまりをそこに見た。また、その空間の目的に応じた装飾を覆わせることで、建築の性格が表されることを述べた。ここで空間を覆った装飾を被覆と称し、被覆は構造に先行することを彼は主張する。ここでは必ずしも被覆と躯体が別離するわけではなく、むしろゼンパーにとっては構造と被覆の完全に調和したギリシャ建築こそを至高の芸術として考えていた。



図3：構造に先行する被覆

また、ゼンパーに共鳴した建築家のひとりであるロースは、世間に被覆材の偽装が流布し始めたことに警鐘を鳴らした。この被覆材の偽装とは、例えば軟材で作られたにも関わらず硬材のような塗装がされた家具のように、表層が内部の構造を覆い隠し、あたかも内部構造までが表層のそれであるかのように思わせる被覆のことであった。ここでは被覆と内部構造が完全に剥離しており、ゼンパーの掲げたギリシャ建築の理想から遠のいている。この現象はのちにコルビュジェも指摘しており、いかに世間に浸透していたかが伺える。

またロースは、女の衣服がエロスの欲求によるものだとして主張した。彼によれば女の衣服は「男の横での身分の誇示」という欲求に基づいており、エロスの変化に合わせてそのデザインも変わっていくことを指摘している。対して、男の衣服は、社会地位の誇示が根底にあることも彼は指摘した。エロスは生殖に基づく、いわば人間の「根源的欲求」であり、それに対して「社会的欲求」があることがここで述べられている。

前章までの内容も踏まえれば、この時代においては、特に女性に人間の「根源的欲求」が見られていたことが伺えると指摘する。ロースは、女たちのモードの最先端を「高級娼婦」と述べ、今和次郎は、裕福な家の女性たちがそれであると述べた。ここにおいて、裕福だったのは彼女たち本人ではなく、彼女らに金銭を与えていた「社会的地位」の高い男性であった。恐らくこのメカニズムを今和次郎が熟知していたことを彼の言説から推察し、第3章での小結としている。

第4章 今和次郎の装飾論

第4章では、まずこれまでの章の整理と今和次郎の装飾論に対する推察を行った。これにあたり、キーワードを「現象の科学」の描画、施主と建築家の「理念と結びついた被覆」、特に女性に見られる「人間の根源的欲求」の三点に絞っている。その三点を踏まえた上で、旧渡邊甚吉邸という建築の理念や今和次郎の立場について整理していった。

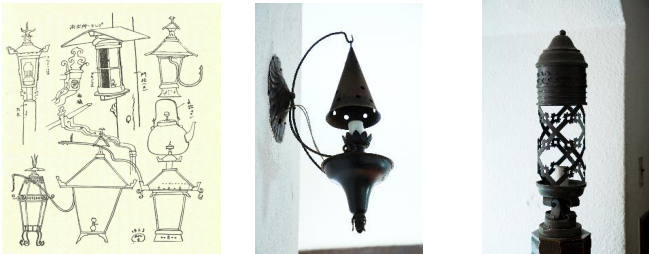
「旧渡邊甚吉邸」は、1934年に、実業家渡邊甚吉の私邸として建てられた建築である。設計者は三人存在し、全体設計を日本最初の住宅作家と名高い山本拙郎が、実施設計を渡邊甚吉との昔馴染みでありエンド建設工務所の創設者である遠藤建三が担当した。既往研究によれば、旧渡邊甚吉邸は三人の設計者の融合によって国内で早期に西洋文化を取り入れたプラグマティズム的住宅を完成させており、また和館と洋館の調和の様からも早期の段階で西洋の模倣を抜け出していた。すなわち、当該建築は、早期に西洋と日本の様式が調和し、施主の希望に沿って生活を内側から保証する奇跡的な住宅であり、かつ、現在の住宅のまさに「祖形」ともいえる住宅でもあった。

また先行研究では、「旧渡邊甚吉邸」が昭和初期の上流洋風階級の住宅であることを述べ、そうしてそのこだわりが特に「ロールスクリーン」と「最新設備の台所」にあることも述べられていた。

これらのことを踏まえて今和次郎の装飾デザインを見ていくと、ここには、チューダーのモチーフやアーツ・アンド・クラフツを想起させるような要素がありながらも、今が愛した「工芸の美」のような素朴さを思わせるデザインが見受けられた。

また、今和次郎は食堂の天井装飾やカトラリー一式のデザインも受けていたが、これは旧渡邊甚吉邸が「最新設備の台所」に力を入れていたことを合わせると、施主の食事の場へのこだわりが前提として浮かび上がってくるように思われる。

旧渡邊甚吉邸は、決して華美な外観をしているわけではなく、竣工記念誌に寄せられた今の言葉を借りれば、「あっさりとした感じの中世英国風」の建築であった。しかし、内部の細部まで凝られたデザインと精緻な仕事ぶりは、誰もが目をみはると同時に、住むに易い落ち着きを得るための建築であるとも今は述べる。今の仕事は、この建築のこういった特徴を少しも損なうことなく、むしろ昇華させる形で完成へと押し上げた。



左から図4・5・6：「工芸の美」のスケッチ/旧渡邊甚吉邸のランプ2種

結論

今和次郎は広く民族学の研究者として知られるが、決して民俗学のみを行っていた人物ではなかった。柳田との対比を考えれば、むしろ年を経れば経るほどに民俗学から離れていったとも言える。しかし、彼は当時の建築家や芸術家とも異なる意見を持っていた。その姿勢は、既往の方針にとらわれない、彼独自の視座を持っていたことに由来し、またそれゆえに彼の理論は第三者にわかりやすい形で提示され、後世へ広く影響していった。彼は完成したネオダーウィニズムの到来より先に、日本にて「断片」というランダム的要素を獲得していたが、これ彼の特異な感性と、関東大震災という突発的な事故、そうして何より吉田謙吉との出会いが重なり合って得られたものだったろう。

先行研究で述べられた旧渡邊甚吉邸の洗練された設計と奇跡的な調和を確認した上で、今和次郎の装飾はそれをより完成に近づけるものという立ち位置は分離派との対立から伺えることであった。旧渡邊甚吉邸の図面を見た際、施主の意図を高い精度で仕上げた山本と遠藤の仕事から、今は施主とその家族がどう過ごすのか、その空間にどういった欲求を持っているかをよく見据えていたが、それは彼の研究にて獲得された「現象の科学」を描画する視座が可能としたものである。今和次郎は、その生活を分析し、求められた装飾箇所に必要な生活の部位を選択して構造化し、デザインに生かしていった。それは生活、ならびに施主の希望を高い精度で叶えた山本と遠藤の設計に肉薄しており、旧渡邊甚吉邸の内部に要求された「理念」に直結した「被覆」の形態として人々の前に現れていた。

また、旧渡邊甚吉邸のこだわりの一つは、食事空間にあった。台所は、かつてより女性のものであった。これは施主である渡邊甚吉の妻が求めた空間でもあり、食という行為は「人間の根源的欲求」に根ざすものであった。そこに、更に渡邊甚吉が求めた社交の場としての食卓が姿を表す。この根源的欲求と社会的欲求の混じり合った空間を、今和次郎は見事な手腕を以って実現させていたのである。

先行研究で指摘された今和次郎の自然主義的側面は、早稲田での教育のみならず、国内で早期にダーウィニズムや被覆論の理論の真髄へ着目し、そこから更に独自の理論を打ち立てた今和次郎の装飾への姿勢があったことを指摘したい。

図版出典・註釈・一次資料

▼図版出典
図1~3、7：筆者作成
図4：今和次郎『今和次郎集』（全9巻、ドメス出版）
図5・6：旧渡邊甚吉邸サポーターズ撮影
▼参考文献（本レジュメに特に参照したもの、他参考文献系は論文にて記載）
◎今和次郎研究
川添登『今和次郎―その考現学―』（筑摩書房、2004年）
黒石いずみ『「建築外」の思考：今和次郎論』（ドメス出版、2000年）
藤森照信「デザイナーとしての今和次郎」（『建築文化』2月号、1990年）
畑中章宏、森かおる編集『今和次郎採集講義』（青幻舎、2011年）
◎旧渡辺甚吉邸研究
・野村渉「旧渡辺甚吉邸に見る日本のプラグマティズム-近代日本建築との相克-」（2017年度 中谷礼仁研究室）
・政本悠紀「室内装飾の変遷と旧渡辺甚吉邸-女性雑誌と三越家 具部を中心として-」（2017年度 中谷礼仁研究室）
・宮原秀明「あめりか屋・山本拙郎の住宅作品の派生としてみる旧 渡辺甚吉邸―実測・解体調査と『和洋設備設計の知識』を通して―」（2018年度 中谷礼仁研究室）
◎ダーウィニズム
島泰三『はだかの起源 不適者は生き延びる』（講談社、2018年）
チャールズ・ダーウィン『種の起源』（堀仲夫・堀大才訳、朝倉書店、2009年）
リマ＝デ＝ファリア『選択なしの進化 形態と機能をめぐる自律進化』（池田清彦・池田正子・法橋登訳、工作舎、1993年）
◎被覆論
川向正人『近現代建築史論』（中央公論美術出版、2017年）
大倉三郎『ゴッドフリート・ゼムパーの建築論的研究』（中央公論美術出版、1992年）
アドルフ・ロース『被覆の原理』『虚空へ向けて』（加藤淳訳、鈴木了二・中谷紀仁監修、アセテート、2012年）
ル・コルビュジェ『今日の装飾芸術』『今日の装飾芸術』（前川國男訳、鹿島出版会、1966年）

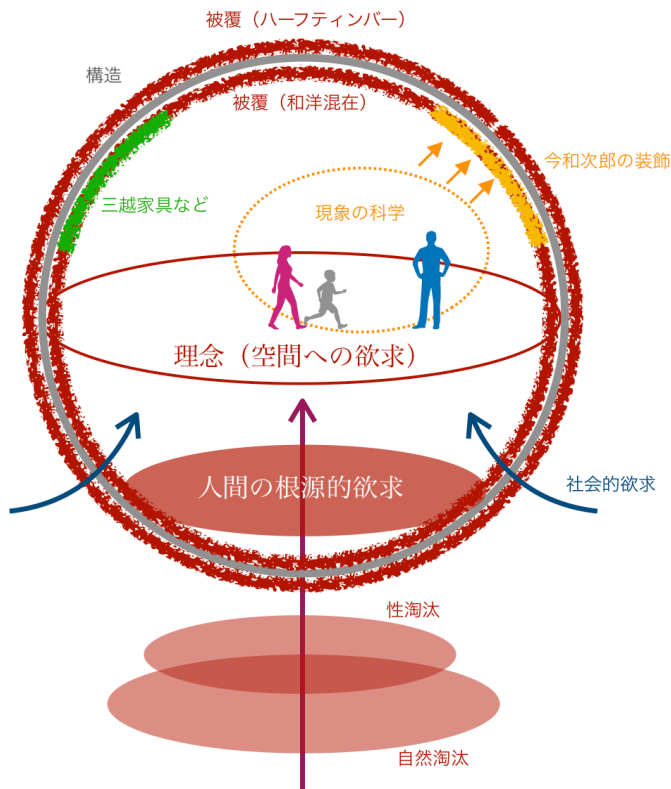


図7：旧渡邊甚吉邸における今和次郎の装飾の立ち位置のダイアグラム